
第四部隊の制裁者

守水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第四部隊の制裁者

【Nコード】

N7072P

【作者名】

守水

【あらすじ】

新しい指揮官として現れた男は、「人を殺すな」と言った。無人の機械で戦場に赴く、とある部隊の話。

第一話

その男がウィリウム・ケストナーのいる部隊に来たのは、本当に唐突だった。

「諸君。今日からこの第四部隊の指揮をすることになった、カールス・レイマン少佐だ。ダン、お前の荷も降りるぞ」

ここに駐留する全部隊の指揮をする初老の男と、見慣れない男を見て、名を呼ばれたダンはぼーっとしながらもかすかにうなずいた。まだ内容を理解しきっていないらしい。

「私からは名前だけにしておこう。詳しい自己紹介を頼むよ、レイマン君」

長身のその男は、軽く頭を下げると、一步前に出た。少佐と呼ばれていたが、一般兵士が着る服装の上に、同色の長いコート。その上から少佐の証拠であるバッジをつけたベルトをしていれば、見ただけで分かる。

「さっきも紹介されたが、私はカールス・レイマンという。こここの部に配属された」

「失礼だが、これまでの軍隊の経験は？」

今の今まで第四部隊の指揮をしていたダンが、挙手しながら聞いた。

「ない。ここが初めてだ」

ダンだけではなく、そこにいた全部隊の指揮者以外の者は、心から驚いたに違いない。

「私はここで失礼するよ。この部の説明は、彼にはしておいたかな」

いつも忙しい総指揮官が、新しい兵士の紹介とはいえわざわざ来るのは珍しい。小さく敬礼を残すと、足早にその場を去った。それを目で追っていたレイマンは、指揮官の姿が消えたのを確認すると、再び振り向いた。黒い短髪の、前髪だけが少し揺れた。

「……レイマンだっけか？ 俺はダニエル・ウィラーだ。ダンって呼んでくれ。ロード指揮官も言ってたが、俺は今までここの部隊の指揮をやってた」

「知っている。それと、すまんが私は愛称で人の名は呼ばないようになっている。ダニエルと呼ぶがいいか」

「あ、ああ」

ダンが差し出した手をまるで握手の見本のように、しかしどこかそっけなく握りながら、レイマンは言った。ここに現れたときから無表情で、冷たい感じはないものの、もちろん温かくもなかった。呆けたようでも怒りも見受けられない。真の無の顔とはこういうものののかと、納得してしまいそうなほどだった。

「じゃ、こっちから自己紹介しよう。ミリア」

ダンの横にいたミリア・コーナから、順に一人一人自己紹介を進めた。ウィリウムもその中に混じり、特に目立つこともなく自己紹介を終えた。

全員終わった後、見計らったようにレイマンが口を開いた。

「ロード指揮官から聞いていたんだが、この軍では各部隊の指揮官は、自分の兵に一つだけルールを守らせることができるらしいが」

「ああ、その通りだ。前の総指揮官がなんだか気まぐれに作ったらしいが、いまだに続いててな。ルール作りは義務だが、なんだっていい。俺のときは『必ず一日コップ一杯の水を飲むこと』だった」
含み笑いをするダンにつられ、何人かが小さく笑った。

「そうか。だがすまないが、私からのルールは少し難しいぞ」

「もう考えてるのか？」

ダンが少し意外そうに返した。

「この第四部隊で私が課するルールは――」

ダンには答えず、レイマンはそれを口にした。

「『絶対に人間を殺してはならない』、だ」

第四部隊は、戦争で活躍するロボットを操縦する兵士たちの中でも、精鋭が集まる部だ。今の時代では、生身の人間が戦場に出ることは少なくなってきた。攻撃されても人が死ぬことのない、遠隔操作のロボットで戦いを進めている。

そのほとんどは、カメラを標準装備している。敵地に榴弾を打ち込むもの、銃撃音に反応して迎撃するもの、爆撃機能を備えた、攻撃兼偵察飛行機。

中でも一番第四部隊が得意としているのは、偵察と爆撃ができる飛行機、「アサシン」の操作だ。所属している兵士たちは、皆「アサシン」の平均操縦技能を持っている。

ローラー足の椅子があり、その前にはカラーの画面と、周りには数多くのボタン。そして手元には操縦桿。飛行機の操縦席を、そのまま部屋に移植したような、変わった光景が、そこには広がっている。通りかかる者のほとんどがいやでも見てしまうその部屋の中は、機械音だけが響く、珍しい静寂に包まれていた。

「……人を、殺すな、だど？」

引きつったような顔を直せないまま、ダンは繰り返した。わずかながら怒りの色も見える。

「少し極端すぎたな。正確には『民間人を殺すな』だ。兵士も殺さないほうがなおいいが」

レイマンは、だんだん大きくなっている怒りに全く気づいていないかのように、さらりと続けた。

「おいあんた。俺たちが今担当してる場所、どこだかわかってんのか？」

怒りは中で爆発したようだ。初対面の人物ということも忘れたのか、ダンは顔を真っ赤にしてレイマンに詰め寄った。

「俺たちは町に逃げ込んで立てこもってる標的を探してんだ！俺たちは建物を爆破するしかない。その上で民間人も巻き込むのだと？　むちゃくちゃ言うんじゃない、軍隊入り初めてのくせしてよ！　なんでてめえなんかが少佐階級なんだ？」

……はじまった。ウィリウムは心の中でため息をついたつもりだったが、現実でも同じことをしていた。初めてこの彼を見たときは、心の底から怖くなった。それほどダンの剣幕は恐ろしいのだ。だが、今の意見にはウィリウムも納得した。民間人を巻き込まないようにするのはかなり技量がいる。建物の破片が思わぬ方向へ飛んで、人に当たってしまうかもしれない。そしてなぜ軍隊入りが初めてなのに少佐なのかは、おそらく部隊全員が思っていたろう。

レイマンは長身なので、ダンは見上げてましくし立っている。レイマンの顔は、それでも微動だになかった。無表情のせいかな、ダンを見下ろすレイマンは、彼を見下しているようにも見えた。

「ダニエル・ウィラー、私が来た時点でこの部隊の指揮官は私だ。兵は指揮に従うものだろう？ それに一言付け加えておくが、このルールを破った者には、死をもって償ってもらおう」

再び全員が、ダニエルさえも凍りついた。顔の色が赤から白へ変わる。

「ルールごときで……死だと？」

その言葉に怒りはなかったが、すぐにそれが復活したことは、誰の目にも明らかだった。

「ふざけんなっ！ てめえいい加減……」

とうとう殴りかかろうとしたダンを、レイマンは鮮やかにかわした。それどころか、どうやったのかさえ兵たちの目にとまらないほどの素早さで、レイマンはダンを床に叩きつけていた。背中を走っているであろう痛みも忘れたように、ダンは呆然と天井を見上げている。

「私の言ったことは本当だ。もしルールを破れば、私はためらわずに殺す。必ずだ」

何もない顔に、かすかに冷酷という名の色が浮かび上がった。

第二話

「ふん、何が人を殺すんだ。んなこと無理に決まってる」

「ダン、一応守っておいたほうがいいぜ。少佐のあの時の目、本気だった」

ぶつくさ文句を垂れ流すダンを、ウィリウムはなるべく抑えていさめた。「アサシン」の操縦席は、等間隔で並べてある。隣で偵察をする元第四部隊指揮官は、舌打ちして操縦桿を握りなおした。現指揮官は、飛行機を操縦する者たちの後ろを、じっとしていられない病人のように、何度も往復している。その目は操縦者ではなく、操縦者の前にある、「アサシン」が映し出すカメラの映像に注がれている。

「……ん、あれは標的を護衛してるやからの一人だ。前に見たことがある。ウィル、見つけたぞ」

「ああ、こっちにも映ってる。やるか？」

「もちろんだ」

ウィリウムとダンの「アサシン」は、標的がいると思われる町の上を飛行していた。二人は攻撃準備をして、先に砲撃したのはダンだった。ウィリウムの画面の中で、例の人物のすぐそばにあった建物が、大きく吹き飛んだ。共に灰色の煙も発生する。

「お、おい！ お前ミサイル使ったのか！？」

驚いてダンを見ると、その顔は狂喜という言葉で表すのに最もふさわしい状態になっていた。ダンはいつもこうだ。人間を、同類を殺すことを一番の楽しみにしている。生活上は普通なのだが、いざ戦争に赴くと、本性が現れる。この状態のダンには、ウィリウムはいまだに慣れていなかった。もちろんこの後の出来事で、慣れる必要はなくなるのだが。

「なんだウィル、そういうお前はどうかやって仕留めようとしてたんだ」

そういうダンの視線は、画面に釘付けだ。会話のために振り向くのも惜しいと思っっているのか。

「お……俺は普通の銃撃で」

「馬鹿言え、そんなんじゃないつ当たるかわからねえぞ。ここは一気にどでかいのでやるべきだ。……ちっ、こいつしぶといな、まだ走ってる」

先ほどの瓦礫の雨を、なんとかしのいだらしい。土煙の中から、今標的にしている人間が走り出してきた。

「もう一発……これでどうだ！」

「待てダン！ やつの向かってる方に人が！」

一回目の建物の爆撃で、ほとんどの民間人は逃げていた。だが突然のことに驚いたか、立ちすくむ影が見えたのだ。

「やつの足を止める。目の前にぶち込んでやる！」

「ダン！ 見えないのか、やつの前には民間人が……！」

無駄だった。殺人狂と化した今のダンに、制止の言葉が聞こえるはずがなかった。

ダンのほうを向いていたウィリウムの横の、小さ目の箱の中で、二つ目の煙が上がった。

「ダン……お前……」

見たくなかった。追っていた標的は死んだだろう。だがその前にいたあの人間は？

ダンが民間人を殺すのは今まででもよくあった。だが今は少佐のあのルールがある。それが余計、一体これから何が起こるのだろうか、恐怖をおおった。

聞きなれたはずの靴音が、妙に響いた。ウィリウムたちの後ろに、レイマンがいた。

「少佐……」

自分が殺したわけでもないのに、ウィリウムはおびえたようにレイマンを見上げた。レイマンは少佐と呼ばれたからか、ウィリウムを見たが、その目はすぐ隣の殺人者に移った。

「よっし！ やったぞウィル！ 今ので確実に護衛の一人は消えた！　　そういうやつの前に一人いたが、あれも兵士だったか？」

「違う……。ダン、あれは民間人だった」

体を横にしているため、レイマンは顔を上げればすぐ視界に入る位置にいる。それをウィリウムは避けたかった。この言葉を言うのも怖い。いつの間にか、二人から顔を隠すように、首をうなだれていた。

「民間人だったのか？　　まあいい。逃げなかったほうが悪いんだからな」

「っ、違う！　あの人はお前の爆撃に驚いて、それで足が――」

ウィリウムの叫びは途中で止まった。ダンの頭上に、無機質な何かが現れていたからだ。それを見たとき、ウィリウムには正体がわかっていった。だがあまりにも突然すぎて、存在を認めなくなかっただけだった。

「お前はルールを破った。死をもって償えと、私は言った」

その言葉の最後と同時に、にぶい銃声が響いた。ダンの体が跳ねた。レイマンが、後頭部寄りの頭頂に押し当てていた銃口をそこから離すと、ダンは糸を切られた人形のように、操縦桿のほうへ倒れこみそうになった。レイマンがその寸前に、ダンの体を後ろから手を回して支え、そのまま床へと放り投げた。頭部から流れ出る血液と脳髄液が、薄汚れた地面に広がっていった。

「少佐、あなた……！」

何が起こったのか、一瞬だけわからなかった。すぐにわかったのは、ダンには死んだということだ。

「見ればわかるだろう、ウィリウム・ケストナー。頭頂部から延髄を破壊した。ダニエルはルールを破ったからな。その場合の制裁も言ってあったはずだ」

簡単に延髄を破壊したとは言いが、いくら至近距離でも、そう楽に延髄を狙えるものではない。このレイマンの銃の腕は、かなり高いものなのだ。

「ダッ……ダン!？」

周りの仲間が集まってきた。この場で銃を手に行っているのはレイマンただ一人。そしてダンが一発の銃弾で死んでいるのを見れば、ダンがルールを破り、レイマンが宣言通り死をもって償わせたのは明白だった。

「言ったらう。必ず殺すと」

以後、この駐留軍隊で初めて、自分の部隊の兵を殺した指揮官として名をはせるカールス・レイマンの顔は、やはり無だった。

「ねーミリア、標的の護衛がこの喫茶店に入ったまんま出てこないんだけど」

「あたしたちから逃げてるんだよ。そこにいる限り、多分出てこないよ」

「えー？　せっかく見つけたのに……」

第四部隊でのミリアの友人、エラ・ミールは、心底がっかりしたようだった。操縦桿から手を離し、勢いをつけて椅子にもたれかかる。

「……威嚇ならいいよね」

「は？」

ミリアは少し呆けた声で返答していた。とびっきりの名案を考えついたような、嬉しそうな顔で、エラは再び操縦桿を握った。

「少佐のは殺すなってルールでしょ？　なら威嚇ぐらいはいいはずだよ。近くの建物を壊して、中にいる人を出てこさせる」

「それで人が死んじゃったらどうするの？」

「だいじょぶだって」

エラの売りである楽観的なところが、彼女のその後の運命にとって、悪魔となった。

「そーら……出てこい！」

喫茶店の向かいにある低めの建物に、エラはミサイルを放った。

この地域はエラたちが先ほどから偵察していた地域だ。先ほど別の「アサシン」が、近くに砲撃をしたため、その建物からは人が全て消え、ついでにシャッターまで下ろして行ったのを確認している。

すぐ隣の建物が倒壊し、慌てたように喫茶店から数人が出てきた。だが護衛らしき人影はいない。

「ちえ、出てこないや。えーいめんどくさい！」

二発目のミサイルの照準が、建物に当たった。ミリアはエラのその画面を見て、叫んだ。

「エラ！ ちょっとそんなことしたらっ……」

「だいじょーぶ、あたし今まで建物壊して、ついでに人死んだことある？ あたし結構運あるんだよ」

変なところに運があるのを、友であるミリアは知っていた。だがその時ミリアには、いつになく嫌な予感がしていた。

「お願いやめてっ！ エラ！」

自分でもおかしいと思うくらいの焦りようで、ミリアは再び叫んだ。しかしエラは「今日変だよ、ミリア」とミリアを見て、ミサイルを放った。建物が爆散した。

エラが狙った部分は、建物の上部だった。中に人がいても、逃げ切れる余裕はある。残っていたらしい人々が、四方八方に散らばっていく。その中に、標的がいた。

「見つけた！ 殺しちゃだめなら威嚇して……」

エラが嬉しそうに笑い、操縦桿に力を込めた。それが合図だったかのように、標的がばたりと倒れた。

「……え？」

エラは呆然と呟いていた。標的のかたわらに、巨大な建物の欠片があった。

画面を見つめる女兵士の後ろに、男が立った。男は手にしていた拳銃を、女兵士の頭頂部に押し当てようと――

「だめっ！」

銃口が上を向いた。横合いから飛び出したミリアが、エラを床に

倒したため、レイマンはそれを避けるのに銃を手元に引き寄せた。ミリアはエラもろとも倒れこんだ。

「お願いします、エラは故意にやろうとしたんじゃない……」

ミリアはとっさに顔を上げ、レイマンを見た。しかしレイマンの銃は既にこちらを向いており、そしてすぐさま火を噴いた。突然同僚に押し倒され、訳がわからないままだったようなエラは、一人立つレイマンを何となく見たのだろう。その額に銃弾が食い込み、血が飛んだ。目は見開かれたまま、エラ・ミールは事切れた。

「……っ！ エラ！」

とっさに身を引いてしまったミリアの目は、既に潤んでいる。周りの兵たちが、だんだんと集まってきた。

「少佐……。どうしてエラを……」

レイマンを見るミリアの頬を、友人を亡くした悲しみから生まれた涙が、溢れるように流れていた。それを見下ろすレイマンは、眉一つ動かさずに言葉を紡いだ。

「エラ・ミールは私の決めたルールを破った。それだけだ。直接手を下していなかったとしても、人が死ぬ原因を作ったのはエラだ。それに代わりはない」

悲しみで一杯だったミリアの顔に、次いで驚愕も広がった。こらえ切れなかった嗚咽が、第四部隊に響き渡った。

ウィリウムが、エラだった物の近くに跪いた。手を目の上にかざし、そっと瞼を閉じた。

第三話

「レイマン、ちょっと面倒なことになった。来てくれないか」

レイマンをつれて来たあの男――ゲイル・ロード総指揮官が、すまなそうに廊下から顔を出してきた。名を呼ばれたレイマンだけでなく、他の兵もつい総指揮官を見ていた。それだけ、この男が各部隊に姿を現すのは珍しいのだ。

「第二部隊の指揮官で、ルイス・オーリってやつがいるんだがな。そいつがあんたに、戦争の仕方を教えるって言い出したんだ。自分の兵の殺し方はわかるのに、敵兵の殺し方は知らないのか、って」

総指揮官はため息混じりだった。名は、ウイリウムも聞いたことがあった。まるで人間をアリかなにかのように殺す、有名指揮官だ。

「断ったなら、俺はカールス・レイマンを、味方兵を殺す裏切り者として、軍から追放してもらおうよう抗議するとも言ってたな。レイマン、何を言われるかはわからんが、来たほうはいい。かまわんか」
「……わかりました」

レイマンは少し躊躇したようだったが、その歩みはしっかりしていた。それがもう少して総指揮官にたどり着く、というぎりぎりのところで、レイマンは足を止めて振り返った。

「ウイリウム・ケストナー」

「は、はい！」

フルネームで呼ばれるのは二度目だ。突然名を呼ばれ、ウイリウムは心底驚き、直立不動の姿勢になった。

「すまんが、付き合ってくれないか。どういうケンカを売られるかわからんが、内容によっては暴走するかもしれん」

「は……」

はい、と返事をしようとしたのだが、ウイリウムは意味深げなその言葉に、つい詰まらせてしまった。

「ウイル、指揮官からの直々のお願いだぞ？ お前に断れるかな？」

明らかにからかいを含んだ、総指揮官の口調だった。顔を出さないわりにはこの男、兵士の特徴を知っている。ウィルの特徴は、自分の所属する部隊の指揮官の頼みは、絶対に断らないというものだった。

「いじめですか、ロード総指揮……。少佐、断る理由はありません。一緒に行きます」

「ありがとう」

その一瞬、レイマンの顔に感情が表れた。まぎれもない、感謝の感情だった。

「じゃ、ルイスのところまで案内しよう」

総指揮官は、日の差す廊下を淡々と歩いていった。それとほぼ似たような歩調で歩くレイマンを、横についていたウィリウムは時々覗き込んだ。先ほどの顔が、本当は見間違いだったのではないかと思うほど、固い表情だった。

「ルイス、お呼びしたぞ」

開けっ放しのドアを覗きながら、総指揮官は壁を叩いた。部屋には「アサシン」の操縦席と一人の男以外、誰もいないし、何もなかった。

「あんたがカールス・レイマン少佐か……。なんだ、その横のは」
ルイス・オーリは、かなり体格のいい兵士だった。「アサシン」の操縦に長けているだけの第四部隊の兵に比べれば、レイマンは体つきがよかった。そのレイマンでさえ、この第二部隊指揮官の前では、細々と見えた。

「私が呼んだ立会人だ。立会人を呼ぶなどはお前は言わなかった。文句はないだろう」

初対面のはずなのに、「お前」と呼ばれたルイスは、いささか頭にきたようだ。器用に片眉だけ吊り上げた。

「まあ、文句はないがな。それよりあんた、指揮官のくせに手をつけたことがないそうじゃないか、こいつに」

ルイスは親指で、様々な光を放つ「アサシン」の操縦席を指した。

「私は兵たちの、戦場での活躍を見ているのでな」

「だめだな、それじゃあ。指揮官たるもの、手本を見せてやらにやあ。この第二部隊は普通戦闘部隊だが、俺だったら見せてやれるぜ、手本を」

「遠慮しておこう」

即座に返ってきた返答に、ルイスは完全に気分を害したようだった。

「総指揮官から聞いたと思うがな、断るっていうんなら抗議してやるぞ。味方兵を殺す謀反者としてな」

相変わらず冷めた目で、レイマンは嫌味そうに笑うルイスを見ていたが、すぐ横にいたウィリウムがなんとか聞き取れる声量で「仕方ない……」と呟き、部屋の中央部へ歩いた。総指揮官はその場へ留まり、ウィリウムはしばし遅れて跡を追った。ウィリウムは囁き声で、レイマンに話しかけた。

「少佐、いいんですか？」

「軍を追放されては困るからな。ここに来た意味がない」

軍法会議にかけられれば、必ず追放されるわけではない。だがレイマンは、その危ない過程も通りたいくないようだった。

「よし、その椅子に座りな。俺の操縦席は特別だからな。遠くからでも見えるだろう」

操縦席の真後ろ、約十メートルほど離れたところに置かれたパイプ椅子に、レイマンは腰掛けた。ウィリウムは立っていいようと思っただが、レイマンが小声で「持ってきて座れ」と言うので、壁に立ってかけてあった同じくパイプ椅子を、隣に置いて座った。

なるほど、確かにルイスの「アサシン」の操縦席は、特別なものだった。「アサシン」からのカメラ映像は、操縦者が座るともちろん後ろからは見えなくなる。しかしそれに加えて、操縦者を見下ろすようにもう一つ、大きめの画面が設置されているのだ。「アサシン」専用の第四部隊でさえないその操縦席を見て、ウィリウムはかすかにねたましく思ったが、多分これはこれから第四部隊にくる最

新版なんだろうと思い直した。ルイスは、その最新版の試用者なのだ。

「見てな。あんたがたが担当してる場所とは別だが、参考にはなるだろう」

映像が動いた。と、間髪いれずに建物が爆発した。ミサイルを放ったのだ。あのダンと同じように、建物の真中辺りを狙ったらしい。発生した煙に隠され、崩れたであろう建物は見えなくなった。そこから逃げるように出てきた人影が多数。それも見る間に動きを止めていった。

「いいか、レイマン少佐。民間人でも、敵になるやつが多い。そういうのを早めにつぶしとくのも、兵の仕事だぜ」

塔のように高い建物に、ミサイルが当たった。ゆっくりと上部が、走る人がいる道路へ倒れていく。倒れる向きまで計算して、ミサイルを撃ったのだろう。

「……！」

ウィリウムは、膝の上に置いていた手を握り締めた。ここまで関係なく、人という人を殺す人間を、ウィリウムは初めて見た。ダンの比ではない。隣のレイマンは足と腕を組んだまま、微動だにしない。もちろん視線はあの画面だ。不動なのは表情も同じだった。

なぜ少佐は何も言わない？ あそこまで人を殺すのを見逃さなかった少佐が。目の前で何十人と倒れていつているのに、どうしてそんな無表情でいられるんだ？

ウィリウムが少佐に叫びたい気持ちを抑えきれなくなったとき、レイマンが動いた。流れるような動きで組んでいた手足をほどくと、靴音を隠そうともせずルイスに近づいていった。人殺しに夢中のルイスは、まったく気づいていないようだ。

右腰近くに吊っていたホルスターから、レイマンは二人の兵の命を奪った拳銃を取った。そしてそれをルイスの後頭部に突きつけ、撃鉄を引いた。忙しく動いていたルイスの腕が、にわかには止まった。

第四話

「……何の真似だ？ レイマン少佐」

「何の真似もしているつもりはないが。あえて言うならお前の真似かもしれんな」

ルイスは手元のスイッチをいじった。上部で光っていたランプが消え、代わりに別色のランプがついた。「アサシン」を操縦しているウィリウムにはわかる。ルイスは「アサシン」を自動偵察状態にしたのだ。

「立て。立ってこちらを向け」

「おいおいレイマン少佐、ずいぶんとやることが派手だな」

おどけたように両手を挙げ、ルイスはゆっくりと席を立った。レイマンは、ルイスが即座にこちらを向き、その体格に合った力で銃を取られるかもしれないと思ったのか、少しずつ後ろへ下がっていた。

「言ってなかったかもしれないが、俺の階級は中佐だ。悪い立場にいるのはどっちかな？」

やっとこちらを向いたルイスは、操縦席から一步、二歩と離れた。お互いが磁石であるかのように、レイマンも同じだけ引いた。

「階級など関係ない。私は一人の人間としてお前に銃を向けている。ルイス・オーリ、お前は私が自分の部隊に課した、私のルールを知っているな」

「ああ、あんたが作ったルールは、軍隊のもんじゃないようなルールだからな」

階級が上だと言った矢先からフルネームで呼ばれたルイスは、いつの間にか立ち上がっていたウィリウムが見ても、完璧に怒っていた。

「なら、お前が今までしていた行為は、私に対する精神的な暴行かな？」

ウィリウムの目に、わずかに首をかしげたレイマンの顔が映った。怒りを湛えた笑みが、そこにあった。

「そう受け取るんならそうしておけ。俺は見本を見せたまでだ」
レイマンとは対照的な爆発しそうな怒りが、引きつった顔に表れていた。

「そうか。だが私は人を殺されると、それが楽しそうにやっているとなると余計に腹が立つ。お前のように階級が私より上だとしてもな。だが私も軍人だ。自分が不利になるようなことはしない。お前を今この場で殺す、ということはない」

殺しはしない、とレイマンは言った。だがあのレイマンがここまで来て、銃を使わないというのはありえない。ウィリウムが思考を巡らせていたその時。

レイマンが身を屈め、ルイスに向かって駆けた。あまりにも突然で、それでいて無駄のない動きだったので、ウィリウムは呆気にとられた。全く動かなかったところから、ルイスも同じだったのだろう。レイマンの倍もあるルイスの腕を右手でつかみ手元に引き、駆けている間に持ち替えていた左手の銃をその右肩に銃口が見えなくなるほどめり込ませ――――

第二部隊指揮官の肩から斜め上へ、いびつな血の花が一瞬咲き、消えた。

「ぐっ……！」

ルイスが呻いた。素早く銃を肩から離すと、つかんでいた左手首を、レイマンはゴミでも投げるように離れた。質素な色の軍服を、血が鮮やかな色に染めてゆく。

「きっ、貴様……！」

「盲管にしかただけありがたいと思え」

肩を抑えるルイスを見る眼差しには、静かな怒りがあった。

「中佐に銃を向けて、ただですむと思って……！」

再び銃口があがった。と同時にそれは火を噴いた。放たれた弾は、ルイスの左頬の肉をえぐった。

「があっ！」

今度は完全な叫び声だった。新たにできた傷に手を回すが、頬からの血は既に床に二、三滴落ちていた。

「死よりも苦痛なものが、わかるか？」

レイマンの腕が、また別の場所に狙いを定めた。見る者を恐怖に落とし入れそうな怒りと笑みは、まだそこにある。三発目の弾は、ルイスの頭髮と頭皮を道連れに、壁に穿たれた。

「死の寸前の、肉体の苦痛だ。四肢を切断された痛みを伴いながら、それでも生きることだ。苦しみ続けることが、死の恐怖をも超える」
四発目。今度は左肩の肉が弾の分だけ消えた。

「お前は、民間人を殺した兵を、私がためらいもなく殺したことを知っていたはずだ。その上で私に見せつけるとは、それなりの勇気があったんだと思ったんだが、そうでもないらしいな」

ルイスの顔にはまだ怒りが残っていたものの、レイマンを見る目は、まるで化け物でも目の当たりにしているような、恐れがあった。

「この、人をいたぶって楽しむ狂人が……！」

かすれてはいたが、はっきりとした声だった。ルイスの精一杯の虚勢だったのだろう。その途端、レイマンが初めて怒りをあらわにした。

「黙れ！ 人を人とも思わん貴様に言われたくない！ いたぶるところか、殺して楽しんでるのは貴様だろう！ 敵国にいる人間だからという理由で、命の価値はそんなに変わるのか？ 死を垣間見たことも、命がどういふものかということも知らん貴様に、同類を簡単に殺す資格などない！」

最後の叫びと同時に、レイマンは五発目を放った。それは腹に食い込むと、今までで一番大量に、血を噴き出させた。肝臓に命中したのだ。

「さあ、最後の弾を、どこに撃ってもらいたい」

銃口は、ルイスの額を捉えていた。腹を押さえている手指の間からは、絶え間なく血が流れ続けている。

「っ、少佐！」

ほぼ衝動的に、ウィリウムは駆け出し、レイマンの前に立ちふさがっていた。唐突な乱入者に、レイマンは目を見張り、わずかに腕を引いた。

「もうこれくらいでいいでしょう？ 中佐だって、もうわかってるはずです。あなたを怒らせると、どういう目に遭うか」

実際、突き動かされるようにレイマンの前に立ったウィリウムだったが、落ち着いてくると、だんだん恐怖がこみ上げてきた。かばったために、一緒に撃たれるのではないか。そんな思いが、あとからあとから湧いてくる。

いつもの無表情に戻っていたレイマンは、しばしウィリウムを見つめた。声を出すのも怖くなったウィリウムは、必死に表情だけで訴えた。ルイスを、これ以上撃たないでくれ、と。

「……………ウィリウム、感謝する」

ふとレイマンが目を伏せたかと思うと、銃を持たない左手が、ウィリウムの肩にそっと乗せられた。

「私を止めてくれたな。あのままだったら、私は自分の言ったことも無視して、あいつを殺していたかもしれない」

手はそのままに、レイマンはウィリウムの後ろに立つ、ルイスを見た。レイマンの戦意が消えたのを感じたのか、がくりと跪いた。立っているのも辛かったようだ。

「暴走するかもしれない、ってこと……これだったんですか？」

「ああ。ウィリウム、どいてももう大丈夫だ。殺す気は失せた」

ほっとため息をついてから、ウィリウムは自分の肩に手を乗せてから、レイマンが“暴走”していた時とは違う、優しい笑みをしていたことに気づいた。

「ルイス」

声は部屋の入り口からかかった。総指揮官ゲイル・ロードだった。ここを立ち去らず、ずっといたようだ。

「わかっただろう。もう不用意にケンカは売らないことだ」

ほら見ろ、と言いたそうな顔で、総指揮官は含み笑いまでしながらルイスを見た。

ウィリウムは精神的に参ってしまい、パイプ椅子にとっかりと座り込んだ。顔だけ後ろに向け、レイマンはまた笑った。ウィリウムの疲れようがおもしろかったらしい。

「……そういえばまだ一発残っていたな」

手にしていた銃を見下ろし呟くと、レイマンは素早く振り上げ、ルイスに向かって最後の弾を撃った。

「あっ、少佐!？」

突如響いた銃声に、ウィリウムは身を乗り出した。レイマンに続いてルイスを見る。血が、また流れていた。ウィリウムが恐れていた額ではなく、最初に銃弾を喰らった、右肩から。

「心配はない、さつき穴を開けたところを正確に狙った。盲管は肝臓ぐらいだろう」

銃をホルスターにしまい、レイマンは右肩を抑えるルイスを見た。ルイスには見えなかったが、あの静かな怒りと笑みをつくって。

「ルイス、足はやられてないな? なら自力で救護室まで行ってこい。途中で倒れようものなら、軍の一、二を争う強靱な体の持ち主の名が泣くぞ」

ルイスはレイマンを見ないまま、軽く舌打ちして、ふらつきながらも部屋を出て行った。

「それじゃレイマン、お呼び出しは終わりだ。戻っていいぞ」

「はい」

総指揮官は二人を残したまま、その場を去った。

「ウィリウム」

「はい」

第四部隊への廊下を歩きながら、レイマンが話しかけた。

「お前は、私が怖くないのか?」

少し自分より背の高いレイマンを、ウィリウムは見上げた。

「私が初めて自分の兵を殺したとき、お前はすぐ隣にいた。そして正気を失いかけた私の目の前に立った。それでも怖くないのか？」
顔を正面に戻して、ウィリウムは少し経ってから話し始めた。

「俺……少佐の気持ちわかります。人をあんなふうに殺す人を、憎む気持ち。でも、同情……できないんです。少佐のあの制裁が、怖いから……。すみません」

やっぱり怖いんじゃないか。ウィリウムは心の中で呟いた。

「謝る必要などない。同情などしてもらわなくてもかまわん。それに、私が恐ろしくて当然だ。だがウィリウム、お前は私の全てが怖いわけではないようだな」

投げやりな言い方ではなく、それでいい、と言っているような話し方だった。

「ええ。俺、嬉しかったんです」

「嬉しかった？」

レイマンが、ウィリウムを見た。

「俺、ずっと思っていました。兵士を殺さないで、戦争を終わらせられないかって。俺たちがいる部隊みたいに、無人の爆撃機とか、ロボットが戦場に行ってるから。だから少佐は、俺の叶いそうもない夢を、実現してくれるかもしれない人なんです」

ウィリウムは軍に入るとき、自ら進んで第四部隊に入りたいと申し出た。戦場に出て命を危険にさらさなくて済むし、必ず敵の兵士を殺さなければならぬ、ということもない。威嚇だけで済ませることもできる。

「お前の夢の実現、か……」

レイマンが、自嘲するように鼻で笑った。

「兵士を殺さないなんていう嫌われそうなルールが、まさか好かれてしまったとはな……。まあ、嬉しいということにしておう」

レイマンの口元が、またかすかに綻んでいた。

「今は敵は生身の兵を送ってきているが、その敵もロボットを使う

ようになれば、兵士など必要なくなるだろう。戦争を進めている政府のやつらが機械を操作して、機械同士で戦えばいい」

レイマンは天井を仰いだ。顔は無に戻っていた。

「人の命は、その人が生まれた国のためにあるんじゃない。国同士の争いに、自分の国の人間だからって、その命を巻き込むなんて馬鹿げてる。ウィリウム」

「はい」

「お前は、私について来てくれるか？」

ウィリウムは答えた。その答えを聞いた時、レイマンは嬉しさと、そうだろうな、と言いたげな悲しみの混じった、しかしやはり嬉しさが勝った表情を見せた。

俺はあの時、何と言ったんだろう。なぜかそこだけ飛んでいる記憶を、思い出すたび見つけようとする。記憶を探しながら、ウィリウムは「アサシン」の起動スイッチを入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7072p/>

第四部隊の制裁者

2010年12月25日09時25分発行